心肺蘇生法に神様は必要か？

「……私のこと？」

「ああ。昨日はばたばたして、あまり詳しくは聞けてなかったしな」

「……まあ、いいけど、その前に私の方から色々聞いてもいい？」

　ヘルメスの言葉に、瞬はコクンと頷く。ヘルメスからすれば、色々不可解なことだらけだろうということは想像に難くなかった。

「取りあえず、俺とこの妖精モドキの関係についてから話した方がいいか？　主に聞きたいのは、『自魂蘇生術』が俺に使われた経緯だろう？」

瞬が『自魂蘇生術』の単語を出すと、ヘルメスの表情がほんの僅かではあるが、険しくなる。

「そうだね。『自魂蘇生術』なんて、私は存在や術式は知っているけど、実際に行われたところを見たことはないし……少なくとも、ごく普通の一般人である君が『自魂蘇生術』を使われたなんて話は、聞いたこともないしありえない。私達は直接この世界の人達には干渉しないことになっているから」

「まあ、妖精モドキから『自魂蘇生術』の話を聞いた時から、おおよそそんなところじゃないかと思っていたよ」

　自らの魂を死んだ人間の肉体に入れることによって、死者を生き返らせるなんてトンデモ技術を、神様から人間にするなんて正気の沙汰とは思えない、というのが瞬の正直な感想だった。どう考えても、神様と瞬じゃ釣り合いが取れなさ過ぎるからだ。

　一応、ことの経緯は妖精モドキから聞いているので、一緒にヘルメスに説明すること数分。

　取りあえず、ヘルメスは納得してくれたようだ。『取りあえず』としたのは、どうも理屈は理解していても感情は納得してくれない様子だったからである。

　まあ、そんなヘルメスを見て、別段瞬も機嫌を悪くしたりしない。

　本人から直接聞いたわけではないが、どうもヘルメスは、瞬の中にいる神様とはかなり近しい仲だったようで、その神様が見知らぬ人間なんかのために死んでいった、となれば、複雑な気持ちになるのも当然と言えた。

「……その件については、私からも謝罪するよ。ごめんなさい」

　とは言え、神様であろうがなんであろうが、人を殺してしまったことに対する償いはしなければならない、とヘルメスは自分の中でそう結論付けたのだろう。姿勢を正して、瞬に向けて頭を下げてきた。

「あー……頭を上げてくれ。事故だし、『自魂蘇生術』を使われたとは言え、俺は今もこうして生きているんだからな」

　別に瞬は何も悪いことをしたつもりはないが、少しだけ胸が痛くなる。こうやってストレートに謝られると、瞬は弱かった。

「いや、でも。そのせいで、色々とややこしいことに巻き込まれることになったわけだし……今回の件は、完全に私等がいいようにやられたわけで」

「その件については、是非とも謝罪して欲しいが……まあそれは、全部片がついてからでいいだろう？」

「そう言ってくれると、助かるよ」

　頭を上げたヘルメスは、瞬の言葉に、複雑そうにではあるが少しだけ笑顔を見せた。

「聞きたいことは、それだけか？」

「あ、あともう一つ」

　そう言うと、ヘルメスは妖精モドキの方に視線を移す。

「君がさっきから言っている『妖精モドキ』って、あの子のことでいいんだよね？」

「ええ、私のことですよ！」

　よく分からないが、妖精モドキは元気だった。

「ああ。あいつは、俺の世界で言うところの妖精に似ているし……一応『宮殿の召使』らしいから、そう呼ぶのが適切かな、と。名前が無いらしいからな」

「も、もうちょっとかわいい名前にしてあげればいいじゃん」

　瞬の言葉に、若干引き気味にヘルメスは呟いた。

　が、

「かわいい？　こいつが？」

　瞬は妖精モドキを見る。妖精モドキ自身は自分の呼び名にさほど抵抗はないようだが、何やら『フフン』というような顔をしていた。

「俺からすれば、ムカつくチビにしか見えないんだが」

「ちょーっ？　瞬様っ？」

「えー？　ひーどーいー！」

「っせーな。大体、こいつには性別ってのがないんだろう？　かわいいとかそんなこと、どうでも良くないか？」

「いや、まあ、確かにそうなんですけど、かわいい名前を付けて頂けるのなら、そっちの方がいいじゃないですかー」

「そうだよー。そんなこと言ったら可哀想だよー！」

「俺の中でこいつはすでに『妖精モドキ』で定着してるんだ。今更変える気はないっての」

　やんややんやと数分。

　結局妖精モドキの名前はそのままだった。

「……で？　君は何が聞きたいのかな？」

　騒ぎもひと段落して、改めてヘルメスは瞬に尋ねる。

「何が聞きたいか……か」

　その問いに対する瞬の答えを端的に表すなら、『色々』といったところだった。

　そもそも、ヘルメスが女性らしい見た目の時点で瞬は躓いていた。想像とは、あまりにかけ離れていたからだ。

　そもそも瞬自身、妖精モドキからあまり神様の話を聞いていなかった。本人が必要以上に話そうとしない上、それ以上に知らなければならないことの確認を優先していた。

　故に、この機会にはっきりと知っておきたいと瞬は思う。

「ヘルメス。まず最初に、これだけはちゃんと知っておきたい。お前らは、一体どういう存在なんだ？」

「私達が一体どういう存在か？」

「言っておくが、『神様です』なんて答えは期待していないからな。もっと具体的に聞こうか。

　お前らは、一体どんな力を持っている？　普段は何をしている？　そして、これから何をやろうとしている？」

　瞬がそう言い終わると、少しの間、沈黙があたりを支配した。

　妖精モドキも何も言わないし、ヘルメスは神妙な面持ちで瞬から目を逸らす。

　恐らく、どう言えばいいのか考えているのだろうと、瞬は思った。瞬は質問した時点で、こうなることを予想していた。

きっと、答えづらいのだろう。『自魂蘇生術』を使われているとはいえ、瞬はただの一般人。そんな相手に、どこまで喋ってもいいか、ヘルメスは分からないに違いない。

故に、今の質問に全て答えてもらえるとは、瞬も思っていなかった。最低でも、どれか一つは誤魔化されるだろうし、話してもらう内容には偽りも含まれるだろう。

だが同時に、何も話してもらえないとも瞬は思わなかった。少しばかり打算的な考えではあるが、瞬は言わば被害者。加えてヘルメスは、瞬が『自魂蘇生術』を使われたことを申し訳なく思っている。

だからきっと、瞬は何かしら、自分の期待する反応があるだろうと考え、沈黙が破られるのをジッと待っていた。

「そうだねぇ……」

　どれくらい経っただろう。少し重そうな声色で、ヘルメスは呟く。

「今の質問には、申し訳ないんだけどどれも答えられない」

「……なんだと？」

　何かしら進展があるかと思いきや、返された答えはそれだった。

　僅かにでも期待していただけに、瞬の言葉も少し強くなる。

　そんな瞬の様子に慌てて、ヘルメスは首を横に振りながら言葉を続けた。

「いや、訂正。一つだけ――それもその中の一部分だけだけど――なら答えられるかな？」

「む……むぅ」

　そう言われると、瞬も落ち着きを取り戻す。

「私がどんな力を持っているのか。これは私個人のことだから話したって構わない。でも、他の仲間達の力については、私は言えないの。……私自身も、よく分かっていないから」

「……自分の仲間のことなのにか？」

「うん。お互いの持つ力については、あまり深く詮索しないっていうのが私達のルールだし……それでも概要くらいなら私も知らなくは無いんだけど、正確かどうかも分かんないから、これについてはそれぞれ個別に聞いたほうがいいと思うよ」

「……まあ、いいだろう」

　まあすぐに知らなきゃならないわけでもないし、と瞬はそう思い、納得した。

「他の二つの質問については、教えてもいいのか、私個人じゃ判断がつかないから言えない。私は教えていいと思うけど、少なくとも、『教えてもいい』っていう神様が二柱はいないと」

「分かった。なら、今はヘルメスの能力だけ聞かせてくれるだけでいい」

　そう言うと、ヘルメスは頷いた。